



植栽されたばかりの落葉樹

木と人間 6

街中に森を創る

松山東雲短期大学

松井 宏光

Hiromitsu Matsui



松山市の市坪地区では松山中央公園の整備が着々と進行している。今年の7月にはその中核となる「坊っちゃんスタジアム」の供用が開始され、引き続き、サブ球場、プール、テニスコート、運動公園などが建設される予定だ。

これらの整備に合わせて、北側に隣接する石手川の堤防改修工事も急ピッチですすめられている。従来、河川の改修は、洪水対策として流路の直線化や堤防の補強などが主であったが、現在、石手川市坪地区で計画されている改修は、昔の石手川を復元することを目的としている。つまり流れは滞りや瀬があつて屈曲し、両岸は樹林で覆われている川本来の姿を復元するのである。しかし、一度、失われた自然を復元することはきわめて難しい作業でもある。

愛媛県史蹟天然記念物調査報告書（昭和13年、愛媛県社寺兵事課）には、石手川の下流域では両側の堤防にアカマツやクロマツの並木が、中流域ではエノキ、ムクノキなど落葉樹の鬱蒼とした樹林が記されている。



上) 密植された照葉樹(手前はアラカシ)。下) 「坊っちゃんスタジアム」はやがて樹林で隠される。



る。それらの記録と、断片的に現存する樹林は復元作業において重要な手がかりとなった。

まず堤防の河川側と外側にあたる中央公園側法面にどのような樹林を形成するかが検討された。その結果、

上流のJ R予讃線鉄橋に近い部分は、鎮守の森をイメージした、クスノキ、シイ、クロガネモチ、ヤマモモ、モチノキ、タブノキなどを主体とする照葉樹林が考えられた。この林から、下流の中央公園橋まではエ

ノキやムクノキを主体とする落葉樹林、中央公園橋から下流部分には里山の雑木林をイメージしたアベマキ、クスギを主体とする落葉樹林が考えられた。いずれも昔の石手川の堤防に普通に発達していた樹林である。

この植栽計画に基づいて、各区画ごとに植栽樹木の種類と位置が決定され、平成12年の春には各区画の植栽が完了した。すでに大部分の苗は順調に根付いており、今は、それぞれの林に向かって生長することを見守るだけである。結果がでるまでには10年以上は必要だろうが、いつの日かここに鬱蒼とした樹林が発達するはずだ。その時、樹林を見る人の誰もが、この森が作られた森であることに気づかないでほしい。これは森の復元に携わった人にとっての密かな願いである。

まつい ひろみつ 一九五二年、福山市生まれ。松山東雲短期大学教授。専門は植物社会学、環境教育。現在は、「えひめ薬園産」と「四国樹木園産」の編集と愛媛県絶滅危惧植物調査が急務である。ただし学校の会議に翻弄されて、本の原稿書きどころか、野外にも夜の町にも出る暇がない。